古代ペルシア語のいわゆる受動文について

野田 恵 剛^{*}

ABSTRACT Keigou NODA, *On the so-called Passive in Old Persian*: The Old Persian construction *mana krtam* had long been taken to be a passive construction. In 1952, Benveniste attempted to show that *mana krtam* is possessive rather than passive. This thesis, however, was challenged by G. Cardona, who maintained a return to the old passive interpretation. In the recent literature Cardona's opinion seems to be agreed among no less scholars. The present author attempts to show, on the examination of the Old Persian synchronic evidence, that Benveniste's explanation is much preferable to Cardona's.

I はじめに

古代ペルシア語碑文には ima taya mana krtam⁽¹⁾ という表現がひんばんにあらわれるが、この mana krtam はながらく「受動文」とされて、たとえば 'This is what was done by me' (Kent 1953) のように訳されてきた。しかし1952年にバンヴニストがこれを所有構文とみるべきであるとする説をとえ (Benveniste 1966)、さらに1970年にはカルドナがそれに対して反論した (Cardona 1970) ために、現在のところバンヴニストに賛成するものとカルドナに賛成するものにわかれている。前者にくみするものとしては、ラザール (Lazard 1976 : 185-86)、アンダーソン (Anderson 1977)、トラスク (Trask 1979) などがおり、後者を支持するものにはバイノン (Bynon 1979, 1980)、スタサ・ハリカス (Statha-Halikas 1979)、ペイン (Payne 1980) などがいる。興味ぶかいのはバンヴニストに賛成するものはイラン語学者にはあまりないということである。筆者はすでに他の所でこの問題をあつかったことがあるが (野田 1977)、ここでは古代ペルシア語の共時論にまをしばって受動説の不備を論じてみたいと思う。本論の構成はⅠでは mana krtam を名詞文とみる説を検討し、Ⅱでは mana krtam を受動文とはみなしえない4つの理由をあげ、Ⅲではカルドナ説に対して反論する。

* 名古屋大学助手

II 名詞文とみる説

mana kṛtam の解釈をめぐることは根本的には同じ考えに発するけれども、表面的にはすこしちがいをみせる2つの解釈があると思われる。1つはこれを名詞文とみる説、もう1つは受動文（動詞文）とみる説である。後者はⅡ以下で扱うこととし、いま前者をみてみよう。名詞文とみる説にしたがえば、mana を名詞修飾の属格（「私の」）とみなし、kṛtam を名詞化した分詞とみるので、mana kṛtam は結局「私の所業」というほどのいみになる。この説は拙文（野田 1977）ですでにふれるところがあったので詳説をさげここではこの説を拒否する論拠だけを簡単にしるすことにする。

(1) ima taya mana kṛtam (DB 1.27)

これ 関係詞 私の・に なされた

論拠の第1点は(1)において上述のように解釈すると taya の機能が不明になるということである。つまり(1)が単に「これが私の所業である」を意味するものであれば *ima mana kṛtam で十分であり、わざわざ taya を用いる必要がないと思われるということである。

(2) yaθa mana vaśnā Ahuramazdāha hamahyāya θarda

のように わたしの・に の力で アフラマズダ 同じ 年

kṛtam (DB 4.52)

なされた

'as by the might of Ahuramazda was done by me in one and the same year' (Kent)

論拠の第2点は、mana を名詞修飾の属格ととると(2)のように mana と kṛtam がはなれている場合には、mana を kṛtam にかけるのに相当無理が生じるということである。古代ペルシア語では名詞や代名詞の属格形が他の名詞を修飾する場合、修飾する（代）名詞は被修飾名詞の直前におかれる（たとえば mana pitā「私の父」DB 1.4）か、または関係詞を介して直後におかれる（たとえば kāra haya mana「私の軍」DB 2.35）。以上の理由にもとづいてこの名詞文とみる説はうたがわしいものとせざるをえない。

III 受動説への反論

1. 明らかな受動文の存在 古代ペルシア語には明らかに受動形ともくされる表現が2つある。1つは(a)接尾辞 -ya- をつけて形成されるもので、もうひとつは(b)完了分詞+助動詞（'be'）で形成されるものである。

- (3) avahyarādi vayam Haxāmanišyā θanhyāmahi (DB 1.6-7) 「そのゆえ われらが アケメネス象のもの よばれる
れゆえわれらはアケメネス家のものとよばれる」
- (4) daranyam hacā Spardā uta Bāxtriya abarya, taya ida
金 から サルディス そして バクトリア はこばれた それ ここで
akarya (DSf 35-37) 「金はサルディスとバクトリアから運ばれてき
つくれた
てここで加工された」
- (5) yadi vināθayaiš nai fraθyaiš (DNb 20-21) 「もし (かれが) 加害
もし 害する 否定 罰せられる
しても (かれは) 罰せられない」
- (6) kārahya nai azdā abava taya Brdya avajata (DB 1.31
人民に 否定 知られた なった ということ スメルディス 殺された
-32) 「スマルディスが殺されたということは人民には知らされなかつ
た」
- (7) xšačam taya haca ahmāxam tauhmāyā parābṛtam āha (DB
王国 関係詞 から われらの 家族 うばわれた 助動詞
1.61-62) 「われら一門からうばわれていた王国」

以上のうち(3)～(5)はaの例で、それぞれ(3)θanhyāmahi, (4)abarya, akarya, (5)fraθyaiš が受動形である。また(6)～(7)はbの例で(6)avajata (ここでは助動詞は略されている), (7)parābṛtam āha が回説的受動形である。

一般にある言語における受動形の数については制限はないと考えられ、明らかな受動形が mana kṛtam 以外に2種存在すること自体は、mana kṛtam が受動形であるとする主張にとって反論となるということはない。しかしこれらのいわば「真の」受動形は以下にみるように、mana kṛtam とはいろいろな点でことなつたふるまいを示すことに十分注意する必要がある。

2. 行為者名詞の表現

- (8) uta-mai anyašci vasai asti kṛtam (DB 4.46-47) “and of me
そしてわたし 他のこと たくさん である なされた
1 単・属・与
much else was done” (Kent)
- (9) taya mana kṛtam uta taya-mai piča kṛtam avašci Ahu-
関係詞 1 単属・与 なされた そして 関係詞-私の 父・属・与 なされた それ-も アフ-
ramazdāh pātu (XPa 19-20) “what was built by me, and that
ラマズダー 守れ
was built by my father, that also may Ahuramazda protect.”
(Kent)

- (10) avaišām avā nai asti kṛtam (DB 4.51-52) “by them was
 3 複・属・与 それほど 否定 である なされた
 not done so much (as)” (Kent)
- (11) avaθā-šām hamaranam kṛtam (DB 2.36-37, etc.) “then the
 そのとき-3 複・属・与 いくさ なされた
 battle was fought by them” (Kent)
- (12) taya-šām hacāma aθanhya (DB 1.20-21) 「私によってかれらに
 関係詞-かれらに わたしから 言われた
 命じられたこと」

(8)～(11)にみられるように、mana kṛtam タイプの文には必ず行為者がみられる。すなわち(8)には -mai, (9)には mana と piça, (10)には avaišām, (11)には -šām がある。ところがⅡ.1でのべた受動文では行為者は必ずしも表現されるとはかぎらない。Ⅱ.1の a の受動形は Kent (1953) の Glossary によればのべ38例あるが、そのうち行為者が表現された例は5つしかなく、しかもこの5例は以下で問題となる2例をふくんでのことである。(例文(12)参照)。また b の受動形の例には行為者を表現した例はない。(例文(6), (7)参照)。

一般に受動文というのは何らかの理由で行為者を表現しない場合につかわれるので、Ⅱ.1の受動形があまり受動行為者を表現していないのはうなずけるとしても、mana kṛtam タイプの文では首尾一貫して行為者が表現されているので、mana kṛtam タイプの文を受動とみなすと、受動文の一般原則にそむくことになる。これはつまり mana kṛtam タイプの文が本来の受動とはややことなるものであることを示すものではないだろうか。

3. 行為者名詞の形態 Ⅱ.2の例にみられるように、mana kṛtam タイプの文の行為者は、すべて属格・与格形におかれている。(8)の -mai は付属形で(9)の mana は独立形、(11)の -šām も付属形で、(10)の avaišām は独立形。(9)の piça は pitar- の属・与格。つまりここでは行為者をあらわす格は首尾一貫している。ところが受動文の行為者の方は(12)にみられるように hacā「～から」をともなう形であらわされており、これは残りの2例も同じである。したがって両者の行為者表現の差は明瞭である (Benveniste 1966 : 178-79参照)。

4. 対応の能動文 受動文は能動文から派生したものと考えられるので、受動文には当然対応の能動文の存在が予想される。もちろん古代語(死語)の場合には受動文があっても偶然対応の能動文が資料としては残されていないと

いう状況が考えられるので、対応の能動文が欠如しているような場合でもそれがいかなる理由によるものか考えなくてははいけない。mana kṛtam タイプの文には対応の能動文があるとされる。今このいわゆる受動文と能動文をならべてあげると次のようになる。

- (13) ima taya mana kṛtam pasāva yaθā xšāyaθya abavam (DB
これ 関係詞 1単属・与 なされた あとで 王 なった)

1. 27-28) “This is what was done by me after that I became king.”

- (14) ima taya adam akunavam pasāva yaθā xšāyaθya abavam
これは 関係詞 1単・主 なした・1単

(DB 1. 72) “This is what I did after that I became king.” (Kent)

- (15) avaθā-šām hamaranam kṛtam (DB 2. 36-37) “then the battle
そのとき-3複属・与 いくさ なされた

was fought by them” (Kent)

- (16) avada hamaranam akunavan (DB 2. 34) “there they joined
そこで いくさ なした・3複

battle”

(13)と(14), (15)と(16)は一見したところ受動文とそれに対応する能動文のようにみえる。しかしそのように解釈すると以下のような疑問点が生じる。第1に, (13), (15)の文のテンスが不明である。(14)の akunavam や(16)の akunavan は構成法(オーグメントの a- や二次語尾)からみてテンス的には未完了形にぞくすることはうたがいない。ところが(13)や(15)はこれを受動とみても助動詞 asti (3人称単数現在形)の省略されたものとしかみなしえないので, テンスとしては「現在」である。(14), (16)にあわせるとすれば kṛtam ではなく *kṛtam āha が予想されるところである(例文(7)参照)。

第2に同じテンスで対応する能動と受動の対がある。

- (17) pasāva-šim Hagmatānai uzmayāpati akunavam (DB 2. 76)
あとで-かれを エクバタナで くしざしに した・1単

「そのあと私はかれをエクバタナでくし刺しにした」

- (18) hau Araxa uta martiyā……Bābirau uzmayāpati akaryanta (DB.
その アラハ と 人々 バビロンで くしざしに された・3複

3. 91-92)「かのアラハと人々は……バビロンでくし刺しにされた」

(17)では akunavam は能動語尾 -am をもち, (18)では akaryanta は受動接辞 -ya- と中動語尾 -nta をもって, テンスはいずれも未完了時である。したがって(17)と(18)のような対こそが真の能動と受動の対応文であるといえる。⁽⁴⁾

それゆえに(13)と(14), (15)と(16)のような対を能動と受動のくみあわせとするのはうたがわしいとせざるをえない。

IV カルドナ説への反論

(19) utā-šām: Aurama/zdā: [nai]y: [aya]d[i]ya (DB 5.15-16) “and by them Ahuramazda was not worshipped”

(20) utā: naiy: Auramazd/ā[-šām: aya]diya (DB 5.31-32)⁽⁵⁾

カルドナはバンヴニストの説に反対して独自の説明を展開した。そのうち後の支持者たちにもっともつよく訴えたのは上の2例の存在を指摘したことによる。Ⅱ.3でのべたように mana kṛtam タイプの文では行為者はかならず名詞や代名詞の属格・与格形であらわされ, ya- 受動の場合の行為者は hacā + (代)名詞であらわされるというのがバンヴニストの論拠の1つであった。ところが(19)と(20)は ya- 受動であるにもかかわらず行為者が単なる属格・与格形であらわされている, つまりバンヴニストの主張に反して mana kṛtam タイプの文と同じ行為者表現をもつ例とされたのである。これは実に mana kṛtam タイプの文を受動文と見るのに有力な証拠である。しかしこの箇所のみには以下のような問題があると思われる。

第1に yad-「あがめる」をここによみとること自体は文脈によくあうけれども aya- のところがどちらにも欠けているので, ayadiya (3人称単数完了受動) 以外のよみの可能性も残されている。第2に32行(=例文(20))では付属代名詞 -šām がこの文の3番めの語についているがこれは文法違反である。付属代名詞は文の第1構成素につくのが原則である。たとえば例文(12)の -šām, (17)の -šim など参照されたい。したがって原文のまちがいをみとめない限りここに -šām を復元することには大いに問題があるといわざるをえない。第3に文脈からみて15-16行(=例文(19))に受動形をつかうのはおかしいと思われる。この文脈は以下になっている。

(21) θātiy Dārayavauš xšāyaθiya avaiy Ūvjiyā arikā āha utāšām
 告げる ダリウス 王 かの エラム人 不忠の であった そして・
 Auramazdā naiy ayadiya Auramazdām ayadaiy
 かれら アフラマズダ 否定 あがめられなかつ アフラマズダーを 私はあが
 3 復・属・与 た めた
 vašnā Auramazdāha yaθa mām kāma avaθādiš akunavam
 の力で アフラマズダ のように 1 単対 のぞみ そのように・ 私はなした
 かれらを

(DB 5.14-17) 「王ダリウスは告げる。かのエラム人どもは不忠であっ

てアフラマズダはかれらによってあがめられなかった。私はアフラマズダをあがめた。アフラマズダのお力により、私の欲したように、私は彼らを処置した」

この節ではダリウスはエラム人について語っている。そして第1の文 (avaiy Ūvjiyā arikā ahā) ではエラム人が主題として選ばれている。ところが次の文になると突然アフラマズダが主語になり、そのためエラム人は重要性を失なって斜格 (-šām) であらわされる。受動態の重要な機能は談話においてテーマを一定に保つこと、換言すれば、本来目的語であるものを受動文の主語にしてテーマとすること (Longacre 1979 : 257) であると考えられるが、この ayadiya という受動形は、このような受動態の機能からみると何の役も果していないようにみうけられる。テーマを一定に保つためにはむしろ受動態はさけるべきであろう。

したがって復元に以上のような問題がある以上(19)、(20)は有力な反例とはなりえない。再考をせまられているのはむしろ(19)や(20)のよみ方の方なのである。

V おわりに

Ⅱでは mana kṛtam タイプの構文を受動とみるべきでない理由をあげた。

Ⅱ.1の「明らかな受動文の存在」ということ自体は、上でものべたように受動説に対して独立した反論になるものではないが、両者の構文上の相違ははっきりと意識すべきである。それ以外のⅡ.2～Ⅱ.4の論拠は一応それぞれ独立して反論になると思われるが、これも1つ1つをとりあげればややよい所もでてくるかもしれない。しかしこれら4つの反論は独立してというよりはむしろ相互補完的に受動説に対立するものと考えるべきものである。

古代ペルシア語の mana kṛtam が受動文ではないという結論はこの構文の史的発展の解釈に重大な意味をもち、またそれは一般言語学的にも興味ぶかいものである。この構文の史的発達の再解釈は別稿で扱う。

注

- (1) 古代ペルシア語の転写は Hinz 1973 にほぼ従う。ただし例文19—21を除く。例文のあとの和訳は筆者のものであるが、英訳は Kent (1953) のもの。したがって mana も manā としない。
- (2) いちばん最近では Pirejko 1979 がこの立場をとっている。

- (3) アラビア語やフィンランド語の受動は行為者を全くあらわさないといわれており、現代ペルシア語やトルコ語でも受動文で行為者をあらわすことはすくない。
- (4) 他の例は、
 能動 taya-šām adam aθanham (DNa 36-37) 「かれらに私が命じたこと」
 こと-かれらに 私が 命じた
 受動 taya-šām hacāma aθanhya (DB 1. 20-21) 「かれらに私によって命じられたこと」
 私から 命じられた
 こと」
- (5) 19と20の例は Kent 1953 のまま。[]は欠損部を、コロンは語の区切りをあらわす。
- (6) 筆者は mana krtam タイプの文は自動詞文(たとえば hammiçyā hangmatā 「敵どもは集結した」 DB 3. 65) と組をなして能格構文をなすと考えているが古代ペルシア語の資料が限られているためそれを立証するのはむずかしい。中世ペルシア語における状況から推測してその可能性は十分あるけれども。一般言語学的興味というのは、はたして歴史的に能格構文が受動文から派生しうるか否かという問題で、アンダーソン(1977)もイラン語についてではないが、インド語の場合にはこれがあてはまると考えている。筆者はインド語には不案内であるが、これ以外の説明が可能なのではないかと思っている。
- (7) この論文は日本オリエント学会第23回大会(1981年10月25日)での発表にもとづいている。

参考文献

- Anderson, Stephen R. 1977. "On mechanisms by which languages become ergative." C. Li(ed.) *Mechnisms of Syntactic Change*, 317-63. Austin: University of Texas Press.
- Benveniste, Emile. 1952. "La construction passive du parfait transitif," *BSL* 48 : 52-62. Benveniste (1966) に再録.
-1966. *Problèmes de linguistique générale* I, 176-86. Paris: Gallimard.
- Bynon, Theodora. 1979. "The ergative construction in Kurdish," *BSOAS* 42 : 211-24.
-1980. "From passive to active in Kurdish via the ergative construction," E. C. Traugott, R. Labrum, S. Shepherd(eds.) *Papers from the 4th International Conference on Historical Linguistics*, 151-63. Amsterdam: John Benjamins.
- Cardona, George. 1970. "The Indo-Iranian construction *mana (mama) krtam*," *Lg.* 46 : 1-12.
- Hinz, Walter. 1973. *Neue Wege im Altpersischen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Kent, Roland G. 1953. *Old Persian*. New Haven: American Oriental Society.
- Lazard, Gilbert. 1976. "Notes de vieux-perse," *BSL* 71 : 175-92.
- Longacre, Robert E. 1979. "Why we need a vertical revolution in linguistics," *The fifth LACUS forum* (1978), 247-70. Columbia: Hornbeam Press.
- Payne, John. 1980. "The decay of ergativity in Pamir languages," *Lingua* 51 : 147-86.

- Pirejko, L. A. 1979. "On the genesis of the ergative construction in Indo-Iranian," F. Plank(ed.), *Ergativity*, 481-88. London: Academic Press.
- Statha-Halikas, Hariklia. 1979. "How *not* to tell a passive: the case of Old Persian *manā kṛtam* reconsidered," *Berkeley Linguistics Society* 5: 350-61.
- Trask, R. L. 1979. "On the origins of ergativity," F. Plank(ed.), *Ergativity*, 385-404.
- 野田恵剛 1977. 「古代ペルシア語 *mana kṛtam* とその展開」『名古屋大学文学部論集』70: 51-59.